

2019 年横浜ナザレン教会三位一体節第二主日礼拝

神を知る喜び ルカ福音書 10:21～24

[聖書箇所]

10:21 そのとき、イエスは聖霊によって喜びにあふれて言われた。「天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました。そうです、父よ、これは御心に適うことでした。 22 すべてのことは、父からわたしに任せられています。父のほかに、子がどういう者であるかを知る者はなく、父がどういう方であるかを知る者は、子と、子が示そうと思う者のほかには、だれもいません。」 23 それから、イエスは弟子たちの方を振り向いて、彼らだけに言われた。「あなたがたが見ているものを見る目は幸いだ。 24 言っておくが、多くの預言者や王たちは、あなたがたが見ているものを見たかったが、見ることができず、あなたがたが聞いているものを聞きたかったが、聞けなかったのである。」

1 神を知ること

皆さんが、「イエスさまの父なる神さまを信じてよかったなあ」と思うことは为什么呢。わたしが「信仰を与えられてよかったなあ」とつくづく思うこと。それは主イエスを通じて、父なる神さまとお知り合いになったことです。父なる神さまを知って、初めて自分が何者かがわかりました。神さまは、天地万物を造られたお方であり、私は造られた者。神さまは永遠のお方ですが、私は短い時を生きて死に逝くもの。塵の影にも過ぎない儂い存在。にも拘らず、自分を神とし好き勝手に生きようとする者。しかし、そんな私をも、その独り子を十字架に与えるほどに愛してくださり、復活の主を示し聖霊を与えて神の子としてくださる。神とはなんということをはなさる方なのだろう！。神を知れば、世界が変わり、自分が変わります、いや、変えられます。

ですが、神を知るということは他のものを知ることとは異なる所があります。それは、神さまの方から示してくだされなければ私たちは神を知ることにはできないということ。今日のルカによる福音書のテキストは、七十二人をはじめとした弟子たち、幼子のような者達に神さまがご自身を示してくださる事を確信し、主イエスが心震わせ、喜びの叫びをあげている場面です。神を知る喜びを主イエスの言葉からみていきたいと思います。

2 小さき者に示す神

七十二人は、主イエスによって二人ひと組でほうぼうの町に遣わされていきました。様々な状況でイエス様のお名前を使って人々の病を癒し、神の国がやってきた…という知らせを言葉と行いで証言していきました。この七十二人は、名前も分からない人々です。イエス様の弟子の中でも無名の信仰者たち。福音

書には書いていませんが、財布も袋も履物ももっていない旅。大変な目にもあったでしょう。狼に追いかけられたり、蛇にかまれそうになったり。人々に無視され、蔑ろにされたり。途中でやめたくなかったこともあった筈です。そんなとき、彼らは、「イエスさま、主よ！助けてください！」とイエス様のお名前を叫んだに違いありません。そうして窮地を脱して伝道が続けることができました。イエス様のお名前を口にすることで目覚しい働きをします。悪霊の支配から人々を解放することができ、神の国の到来を告知らせて多くの人がイエス様を信じたのです。自分たちでもびっくりしたことと思います。そして、この伝道を通じて、七十二人は主のお名前を通じて働かれる神の力を経験しました。彼らは、イエス様を通じて父なる神を知ったのです。だから、彼らは喜びあふれてイエス様のもとに戻ってきました。

そんな彼らにイエス様は、「敵のあらゆる力に打ち勝つ権威を、わたしはあなたがたにさずけた」と実り豊かな伝道であった理由を明かしました。弟子たちの力ではなく、イエス様がさずけた力のおかげでした。そして、悪霊が自分たちに屈服することに喜び高揚する弟子たちに言います。「しかし、悪霊があなたがたに服従するからと言って喜んではならない。むしろ、あなたがたの名前が天に記されていることを喜びなさい。」天に無名の弟子たちの一人一人の名前が記されている、それは天の父なる神が、イエス様の名前を帯びた一人一人を知っていてくださるということです。イザヤ書にはこういう言葉があります。「見よ、わたしはあなたをわたしの手のひらに刻みつける。」（イザヤ書 49：16）。イエス様はこの時、聖霊を通じて、父なる神の手のひらに、ご自身が愛する弟子たちの名前一つ一つが刻まれていることを確かにご覧になったのではないかと思います。だから喜びがイエス様の全身に満ち溢れます。そうして口を開かずにはいられなかった、叫びをあげずにはいられなかったのです。

「天地を造られ支配されている父よ、あなたの御名をほめたたえます」聖霊は言葉を求めます。イエス様は続けます。「これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました。そうです、父よ、これは御心に適うことでした。」

3 喜びほめたたえる

この主イエスが喜びの叫びをあげる様子から思い起こされるのは、母であるマリアの讃歌です。マリアは、天使から「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる。」と受胎告知をうけ、それを受けいれました。その後、天使に「身ごもった不妊の女性」と紹介され洗礼者ヨハネの母となるエリサベトのところへ訪ねていきます。エリサベトと出会い、神の救いの御業に自分たちが用いられていることを知ったマリアは、喜びの賛歌を歌います。「自分達のような小さい者をも用いて人間を救おうとするお方、それが神なのだ」と新たに神を知ったマリアの躍るような喜びが伝わって来ます。それが、教会ではクリスマスの頃によくうたわれる「マグニフィカート」です。「わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救

い主である神を喜びたたえます」という言葉が始まります。この「喜びたたえます」と訳されているギリシャ語が今日のテキストの21節、「イエスは聖霊によって喜びにあふれて言われた」の「喜びにあふれて」という言葉と同じです。マリアはさらに歌います。「身分の低いこのはしためにも、目をとめてくださったのです。」「権力ある者をその座から引き降ろし、身分の低い者を高くあげ、飢えた人をよい物で満たし、富める者を空腹のまま追い返されます。」イエス様も歌います。まるでマリアの歌声と時空を隔てて響きあうように。「これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました。」

4 幼子

「幼子」というと、私たち、「純粹無垢な子供」というイメージを持つかもしれませんが、ここに出て来る「幼子」という単語はそんなよい意味はありません。むしろ、「言葉も話せないような未熟な者」という意味があります。人間的に考えれば、とても神を知ることができるような知恵があるわけでも賢いわけでもない、言葉も話せないような者。だが、そういう者にこそ、神はご自身を示してくださる…とイエス様、驚いておられます。

5 神の愚かさ

この神について伝道者パウロは語ります。「神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです。」神は神の賢さに留まろうとせず愚かにさえなってくださった、神はご自身の強さに留まろうとせず弱くなってくださった、それがキリスト・イエス。そうして私どもにご自身を示してくださいました。私たちが神を知り、人の賢さを捨て、神の愚かさに生きるために。私たちが神を知り、人の強さを捨て、神の弱さに生きるために。神を知り、イエス・キリストにならう者となるように。

ですから、20節での「幼子」は、『神のみ前に自分が言葉も満足にしゃべれない愚か者だ』と自分を示された人」ということでしょう。自分を知恵ある者、賢い者とする者は、まだ神の御前にある自分を知らない。だから、神を知ることとはできない。神に対して自分はいかに小さいか、幼いか、神に対して正しく自分を知る者こそ、父なる神は顧みてくださり、ご自身がどういう方であるかを明らかにしてくださるという真理を歌っています。

6 幼子は私達

主の言葉を繰り返します。「これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました。」“幼子、言葉も話せない小さい未熟な者として自分を示された者”とは、そうです、聖霊が与えられて神の子として新たに生まれた者たちのことでもあります。新しい存在とされる一人一人。私も、教会の皆さんもそうだと確信します。

しかし、私は知識もなく賢くもないのに、すぐに高ぶる“威張りんぼ”です

から、このイエス様の言葉は耳が痛いです。自分にとっては、いつも不都合な真実です。でも、このように耳が痛いことを聞かせてくださることを、主イエスに感謝します。主から聞かせてもらえなければ、私は父なる神から離れて自分が神となる道を突っ走るからです。だから自分の高慢に気づいたら、いえ、気づかされたら、気づかせてくださった父なる神さまに「ごめんなさい、神さま、私が高慢でした。許してください」と真剣に叫び、心から神を呼び求めたい…と願っています。

7 成長する幼子

神さまから見れば、私たちはみな新しく生まれたばかりの者であり、言葉もしゃべれない幼子に違いありません。未熟な者です。ですが、一旦生まれた以上、幼子のままでいるわけにはいかず、成長していかなければなりません。成長できない者は生きることはいかなるののですから。

どうやって成長していくのでしょうか。生まれたばかりの赤ん坊は、まず親と深い関わりを持ちます。親が自分におおきな関心を払い世話をしてくれることを頼りに生き始めます。おそらく、自分の親を待つこと以外には赤ちゃんにできることはなにもありません。お腹がすけば、泣いて親を呼び、そして自分の成長に必要なものを求めます。新しく生まれた幼子は成長しなければならない、そうであるなら、養育してくれる大人が必要なのです。赤ちゃんが親から言葉を覚えるように、私たちもイエスさまを通じて神さまに語りかける言葉を覚え神さまとの関係において成長していきます。成熟していきます。その過程で、神さまは私たちにご自身を示してくださいます。子供が養育される過程で親がどういう人間か知るように、私たちも神さまがどのようなお方を示され、知っていくのです。

そう、神を知るといふことの「知る」というのは、人格的な交わりです。人が人とお付き合いをして、相手を知るように、私たちは父なる神とお付き合いをして、神を知ることが許されています。私たちは、主イエス・キリストを通じて父なる神を知ります。「父がどういう方であるかを知る者は、子と子が示そうと思うものの他には誰もいない」とある通りです。子とはイエス様のこと。イエス様の十字架と復活の出来事を通じて、父なる神の愛がいかに正しいものであるか、父なる神の正義がいかに底知れない愛に満ちたものであるか、神の知識がいかに広く大きく無尽蔵であるかを、私たちは新たに経験し、心震わせ、喜ぶことが許されています。「味わいみよ、主の恵み深さを！」とある通りです。

8 キリストの愛を知る

主の恵み深さを存分に味わった人がいます。古代最大の伝道者パウロです。彼こそまさに神を知ることの喜びに生きたキリストの証人でした。パウロは、エフェソ信徒のために次のような祈りの叫びをあげています。「キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解し、人の知識をはるかに

超えるこの愛を知るようになり、そしてついには、神の満ち溢れる豊かさのすべてにあずかり、それによって満たされるように。」

この聖書テキストについて「キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さ…と四つの次元があげられている。通常、空間を表すならば、長さ、高さ、深さの三次元でいいはずだ。どうして四つの次元があげられているのだろうか？」と疑問に思った人がいます。彼はずっとそのことを考え続けていて、ある時、気づかされたそうです。「そうだ、パウロは今、キリストの愛のうちに飛び込んでいるのだ、そうしてぐるっ～～とあたりを見回している。自分を包むキリストの愛を上下四方をぐるう～～と見回して、『なんて長いのだろう、高いのだろう、深いのだろう』とびっくりし、『なんて広いんだ！』と叫んでいる。だから四つあるのだ！」。まさにその通りだと思います。

そうです。私たち被造物が知り尽くすことなどありえない広さ、大きさをお持ちなのが神であり、キリスト・イエスなのです。だから、私たちはいつも新たに神の愛を知り、心を震わせるような新しい喜びを知るのです。そうして私たちは成長していき、神の満ち溢れる豊かさのすべてにあずかり満たされます。造られた者が、造り主である神の大きさに生きることができるとは思いもかけぬ幸福です。

9 キリストに生きる

そのパウロがこのように語っています。「わたしにとって生きるとはキリストです。」私にとって生きることは、キリストそのもの。キリストなくして、私という存在はありえないし、私の人生は考えられない。彼はそう言い切っています。口先で「キリストのみ」という人は数多いでしょうけれど、そういう人々の名は消えていきます。そこに徹して生き切った人がパウロの名は残りました。「わたしにとって生きるとはキリストです。」と言い切れるほどにキリスト・イエスとの深く強い関わりに徹して生きたパウロだからこそ、福音の真髓をつかみ、多くの人にキリストを伝えることができたからです。私も、私たちも、パウロに倣いたいと思います。私達も「生きるとはキリスト」という想いを与えられているからです。

私の尊敬する説教者が次のような経験談を語っているのを聞いたことがあります。礼拝が終わった後の壮年会か何かの集いで、司会者が「おかたい建前はこれまでにして、ここからはざっくばらんに、本音でいきましょう」と。この言葉に牧師はショックを受け、翌週の説教でこう語ったそうです。「確かに私たち日本人は“本音と建前”を使い分けるといふ。しかし、キリストに生きる者に本音も建前もないのだ。あつてはならない。キリストに生きることを単なる建前にしてはダメだ、それではいつまでたってもイエスさまは分からない。」私もその通りだと思うのです。

イエス様に徹して生きるということを実践しない限り、私たちは神とお付き合いすることにはならないのですから。イエス様に徹して生きるということとは、一面苦しいことです。敵を愛さなくてはならないし、人を裁いてはならないの

ですから。自分が打ち砕かれます。ですが、そこを恐れて自己正当化ばかりしていても、キリストはそれをよしとはされない。いつまでたってもキリスト・イエスを知ることはできません。

「敵を愛しなさい」という教えは、それを実践しようとして初めて、いかに苦しいことか、難しいことであるかが分かります。しかし、私達は、その自分の苦しきを通してこそ、キリストの愛を知るのです。自分を殺そうとする敵に向かって、「父よ、彼らをお許してください、彼らはなにをしているか知らないのです」とそう祈ったイエス・キリストの声を真実に聞き、その愛の深さ、大きさ、高さ、ひろさを知ることができる人は、敵を愛そうとしてのだうち苦しんだ人です。敵を愛そうとしてできない自分に苦しみ絶望を覚えるその所で主を仰ぎ見てこそ、私たちはキリストを経験し、神を経験することができます。敵を愛せない苦しみにのだうちまわり、主イエスの名を呼び、助け求め叫ぶ。必ず必ず主が憐れんでくださり、ご自身をしめしてくださいます。その時、私たちの目が開かれます。耳が開かれます。多くの預言者や王たちが切望した主の言葉を、救い主の言葉を自分に向けられた言葉として聞くことができます。そうしてこそ、主に従う道を選び取らせてくださいます。長い時間がかかるかもしれませんが、一瞬かもしれませんが。神がなさる事ですから、判りません。しかし、必要な時間をかけて必ず起こることです。

敵を愛そう、敵を許そうとしない人、キリストを生きようとしらない人は、神を知ることはありません。キリストを他人事とすれば、神を知ることはできないのです。主が、「**あなたがたの見ているものを見る目は幸いだ**」と祝福されているのは、キリストを他人事とせず、キリストを生きることによって神を示されていく者たちです。そのような者達の集まりが、神の国です。まさにキリスト・イエスがもたらした神の国とは、遠く離れて外から眺めるものではなく、そのうちに飛び込んで生きるものです。

10 教会

いや、「キリストを生きること、そして神を知ることは個人の事柄ではないのか」と思うかもしれませんが。しかし、それは違います。父なる神が子なる神を愛し必要とし、子なる神が父なる神を愛し必要としたように、キリストに生きる者は、他者を必要とします。キリストを生きる私たちの信仰は、個人的な祝福だけを願い求め、神を知らない世界の悲惨をそのままにしておくことを許しません。キリストを個人的な楽しみに閉じ込めてはいては、人を救うという神の目的が果たせず、もはやキリストではなくなるのです。

横浜ナザレン教会集められた私たち、人数は少ないのですが、一人一人違います。ですが、一人の主イエス・キリストによって結ばれた仲間です。だからお互いに支え合います。時には引っ張り上げます。祈りあいます。そうして、自分ひとりで生きる生き方から飛び出し、人と共にキリストに生きることを学ぶのです。「人と共にキリストに生きる」ということは、共に生きる人を赦し受け入れるということです。そこで私達は神を知り、成長し、変えられていき、

イエス・キリストの目撃者として、証人として、イエス・キリストの名を帯びて、この世界に出て行くのです。そこでもご自身を示される神を新しく知り、ますます目撃者として証人として私達は整えられます。七日ののち、私達は主イエスのもとに戻って来て、主イエスの喜びに満ちた祝福の声を聞きます。「**あなた方が見ているものを見る目は幸いだ**」。そのようにしてキリストに生きる民が集まる神の国は、キリストの体なる教会を中心に、前進します。神の国の最前線には、いつも神を知る喜びで満ち溢れた主イエスと主が祝福される教会があります。横浜ナザレン教会もそうです。なんと幸いなことでしょうか。父なる神に賛美と感謝をささげ、ほめたたえます。